

# 正しく鉛筆が持てるようにするには

## ～こども園の取り組みと連携の課題～

つまこども園

「こども園の園児の鉛筆の持ち方がむちゃくちゃで、小学校では困っている。」との苦情を受けることがあった。小学校に入学する前に、正しい鉛筆の持ち方の指導をしてもらいたいとの要望と受け止めた。従来から本園では、園児の運動機能の発達と関連づけて、筆記具の持ち方の指導を行っている。今回の指摘への対応という点では、園児が正しく鉛筆を持てないこと責任をなすりつけるのではなく、共に幼児の発達を正しく理解した上で、年齢ごとに到達点を定め、個に応じた指導をするという共通理解が必要であると考えた。

そこで、本園では理論的に「幼保小連携の課題」、「運動系の発育・発達と上肢・手の機能と筆記用具の操作」、「基本的生活習慣の自立と重要性」について検討を行った。以下に「つまこども園の取り組み」について説明する。

### A. 幼保小連携の課題（文献より）（図1）

こどもにとって有益な連携を進めるためには、双方の職員の意識の差のズレを解消することが必要である。そこで、こども園の職員の意識と小学校教員の意識とのズレについて考えた。

#### 1. 小学校教員の意識のズレについて

文献ではこども園の職員が推測する「入学後の子どもの戸惑い」と、小学校教員が推測するそれとは微妙にずれているとされている。

(1) 保幼小教職員が共通して意識することの上位1・2位に位置するものは

- ① 「長い時間、座って話を聞くことができること」
- ② 「チャイムで区切られた時間の流れに慣れること」

(2) こども園教諭が3・4番目に意識するものは

- ① 「小学校教師の言葉遣い（指示口調）」
- ② 「むずかしい言葉」

と、言葉の問題を挙げているが、小学校教員はあまり意識していないと言われる。

この言葉遣いや口調、声音は、小学校教員が気付かずに新入生に対応してしまう配慮を要する点であり、子どもが感じる段差のうちの大きな課題の一つと考える。参考文献①

#### 2. こども園保育教諭の意識のズレについて（図2）

(1) こども園の保育教諭が、小学校入学を意識して必要と考えていること。

80%以上が

- ① 「一斉に話を聞く」、
- ② 「みんなの前で発表する」、
- ③ 「自分の名前を読める」、
- ④ 「手を挙げて発表する」
- ⑤ 「人前で自分の名前が言える」、
- ⑥ 「数字やひらがなを意識した環境整備」といった項目を選んでいる。

70%以上が

- ① 「話し合いの時間」
- ② 「場面に応じたあいさつ」を、

60%以上が

- ① 「左右・上下・前後がわかる」
- ② 「自分の名前が書ける」
- ③ 「一日の流れを意識させる」 をあげている。

このことから、就学前教育と学校教育の段差を縮小し、土台となる基礎的な力をつけておきたいという配慮が、こども園保育教諭から伺える。参考文献②

## (2) 興味深いズレ

小学校一年生担任から強い要望が出ているのは“正しい鉛筆の持ち方”についてである。小学校教員からは、

- ① 「鉛筆の持ち方指導は短時間しか時間が充てられないので、すでに癖のついた鉛筆の持ち方を、時間をかけて矯正する余裕はない」
- ② 「お箸の持ち方と一緒に、なかなか直らないので、最初が肝腎」
- ③ 「持ち方が悪いと、筆圧不足や高学年で画数の多い漢字学習が困難」などの意見がある。

これに対し、こども園保育教諭は、「鉛筆の持ち方」への配慮は54%に留まっている。「そこまでしなくても」「それは学校で指導すること」という考えも根強く、溝はなかなか埋まらないようである。参考文献③

## B. 幼児の発達（文献より）（ 3）

### 1. 運動系の発育・発達と上肢・手の機能と筆記用具の操作について

#### a. 逆手握り

筆記具を全指で握り込み、肩関節や肘関節の運動を用いて描く。この持ち方は手指の動きを用いることができないため、細かな描画や書字には不向きである。

#### b. 順手握り

この持ち方になるとやや手関節や手指を動かして描くことができるようになる。

#### c. 動的トリポッド把握

この持ち方は最も成熟した持ち方とされている。母指、示指、中指の3本の指で三脚(tripod)を形成しており、肩-肘-手首を固定し、手指の運動で細かな描画や書字が可能となる。

最近是非常に力を入れた状態で筆記具を持つ子どもや、長時間書く・素早く書くといったことが苦手な様子の子どもの数が増えてきている。また、最近の子どもの持ち方に「d. 側方トリポッド把握」が多く見られるが、大人もこの持ち方が多くなっている。こうした理由の一つに考えられるのが、幼児期において筆記具の持ち方の型付けが行われていない影響が考えられる。

保育の場でも「子どもが何を描いているか」は保育者も熱心に見るが、「どのように描いているか」は意識が低いようである。参考文献④

## 2. 上肢の安定性獲得の重要性 (図4)

手の動き全般にかかわる「上肢の安定性の獲得」の重要性を保育者は意識する必要がある。筆記具の「逆手握り」から「動的トリポット把握」への変容には、その持ち方だけでなく、上肢が肩、肘、手首と安定していくことが重要であると言われる。

上肢が安定することが指先を自由に使用し、複雑な操作を可能にする。つまり、正しい持ち方だけを教えるだけでは不十分であり、その際の肩、肘、手首の状態をバランスよく確認していくことが必要である。参考文献⑤

例えば、ハサミを使い始めたばかりの子どもは肘を高く上げ、大きく腋を開けた状態で、順手握りのように手掌が下を向くようなハサミの持ち方で切っていることが多いが、はさみの使い方が上手い子は肘を体の横に固定させ、手首もしっかりと固定した状態で指先だけを使用して切ることができる。参考文献⑥

このことは活発な運動場面でも同様で、竹馬にしても、乗れない子どもは一見するとバランス感覚が悪いように思うが、よくみると肘を高く上げ、大きく腋を開けた状態で乗る。上手く乗る子は肘を体幹付近で固定しているので、手首もしっかり安定させて竹馬を操作している。

複雑な手指の巧緻性の獲得には上肢の安定性の獲得が重要である。保育者はこのことをふまえて、子どもの援助を行う必要がある。参考文献⑦

更に、手首がしなやかに動かないと、曲線の多いひらがなは上手に描けないし、筆圧も不十分になる。そこには多くの要素を意識した丁寧な支援が必要である。  
参考文献⑧

## 3. 基本的生活習慣の自立の重要性について

基本的生活習慣は自然と身につくのではないため、保育者は毎日同じように反復を繰り返し、習得させなければならない。この行為には忍耐と飽きないようにする工夫、規則正しく行う必要がある。その結果、子どもは自分の物として身につけることができ、1人でできるようになる。

乳幼児の習慣は新しく刻まれていくものだからこそ、将来にわたってできるだけ健康的な生活が送れるようによいものを習得させたい。そのためには、保育者は良い生活習慣の重要性を認識した人材でなければならない。参考文献⑨

基本的生活習慣の自立基準年齢は、約70年前とではずいぶん異なっている。これは、世の中に便利な物が出回ったことや、保育者のしつけへの関心度の違いによると考えられる。調査では、食事の習慣の自立標準年齢を抜き出してみると昔と今では若干変化している。1936(昭和11)年では、3歳6か月で箸を正しく使うことができるようになっていたのに対し、2003(平成15)年では、箸を正しく使えるのは6歳になっている。参考文献⑩

## C. つまこども園の取り組みについて

### 1. 3歳児

絵画をする時にクレパス、塗り絵遊びをする時にクーピーを使用する。2～3割の子どもが逆手握りになっているが、主に握り箸の子が多いと保育教諭は感じている。そこで、箸を正しく持てるようにすることが鉛筆を正しく持てるようになる第一歩と考え、箸の正しい持ち方指導を3歳くらいから始める。

また、運筆に必要となる指先の力加減、手首・腕・肩のしなやかさを身につけるために、3歳児のクラスから自分のはさみを所有し、一回切り、直線切り、曲線切りへと、スモールステップで少しずつ難しい課題に取り組めるように保育計画に取り入れている。

### 2. 4歳児

クレパス以外に、サインペンや色鉛筆を使用するようになる。逆手握りの子は徐々に減ってきて次第に側方トリポット把握や動的クアドリポッド把握の子が増えてくる。理想とされる動的トリポット把握までもう一息というところである。しかし、ここを修正していくには根気のいる指導になってくる。『文字と数の学びタイム (学研)』に於いては、鉛筆ホルダー (ゴム製の補助具) を使った鉛筆の持ち方指導を行っている。職員も、若い子どもたちに、わざわざ鉛筆の持ち方指導をするのには抵抗感が無いわけでもなかった。しかし、鉛筆ホルダーの使用にあたっては学研の教師と共に、3本の指の添え方を子どもたちに助言するなど、抵抗を感じることなく指導できている。同時に箸の持ち方は継続して指導を行っている。

### 3. 5歳児

箸が上手く持てない子には、栄養士が個別指導する。スポンジをつまむ練習から始め、次第に固い物や小さな物をつまむ練習へと進めていく。子どもによっては、鉛筆が正しく持てるようになってから箸の持ち方が上手になる場合もある。「一本の箸を鉛筆持ちして、もう一本の箸を薬指で添える」といえば、フォームがだいたい完成するからである。参考文献⑪

また、先述の上肢の安定性の獲得が必須であり、その獲得に向けては年齢に応じた運動 (鉄棒や竹馬・ポックリ、跳び箱など) を計画的に取り入れている。このことによりバランス感覚の育成を促している。

このようにつまこども園においては、鉛筆を持つための事前課題として、箸の持ち方指導、はさみの取り扱いと指導、運動系の発育・発達に向けての指導を行っており、4・5歳児においては鉛筆ホルダーを使用しての運筆や文字指導 (学研) を取り入れている。

一方で、最近子どもたちが授業中にすぐに姿勢が崩れると耳にする。体を支える腹筋や背筋が未成熟で、座る姿勢も立つ姿勢も、体をイスや机にもたれさせがちであるようだ。これに対応し、つまこども園の椅子は、人間工学の観点から検証・開発された背もたれないピットチェアを使用している。この椅子の特徴は、「腰骨を立てることで、姿勢良く座れる形状は、子どもたちの姿勢をピッと伸ばす。」とある。

参考文献⑫

更に、運動会では鼓笛パレードを披露している。その基本理念は「幼児の心と体を、最も機能的に発達させ、芸術感覚、身体運動感覚の一如的な訓練によって幼児の持つ無限の資質を総合的に高めようとする教育である。」とし、たくましい体・ゆたかな情操・すぐれた知能の相関教育として取り入れている。参考文献⑬

また社会の変化に対応しアクティブラーニングを意識した「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に対応する内容へと移行しており、『自ら健康に必要な習慣や態度を身につける』こと、『進んで社会生活における望ましい習慣や態度を身につける』ことをねらいとし、発達に応じた表現方法の一端で、親しみをもちながら『自己表現を楽しめるよう』な活動になるよう、活動の見直しに努めている。参考文献⑭

本園でのこのような取り組みを、小学校の先生方にもご理解頂き、課題を共有化することで、学びの連携を意識した活動を通して互いに批判しあうことなく、子どものより良い発達にかかわることができるように努力すべきではないかと考える。

#### 〈備考〉

- ① 参照、新保真紀子、『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』明治図書出版、2018年、54頁。
- ② 参照、新保真紀子、『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』明治図書出版、2018年、54頁。
- ③ 参照、新保真紀子、『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』明治図書出版、2018年、56頁。
- ④ 参照、勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年、45頁。
- ⑤ 参照、勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年、45頁。
- ⑥ 参照、勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年、45頁。
- ⑦ 参照、勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年、45頁。
- ⑧ 参照、新保真紀子、『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』明治図書出版、2018年、82頁。
- ⑨ 参照、勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年、86頁。
- ⑩ 参照、勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年、90頁。
- ⑪ 参照、<https://sawachin.com/post-352/> 2020/04/20
- ⑫ 参照、<https://www.jakuets.co.jp/product/child/tsukue/> 2020/04/20
- ⑬ 参照、全日本幼児教育連盟 畠山國彦、『幼児音体教育』、共同印刷株式会社、2004年、8頁。
- ⑭ 参照、内閣府・文部科学省・厚生労働省告示、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 2017年

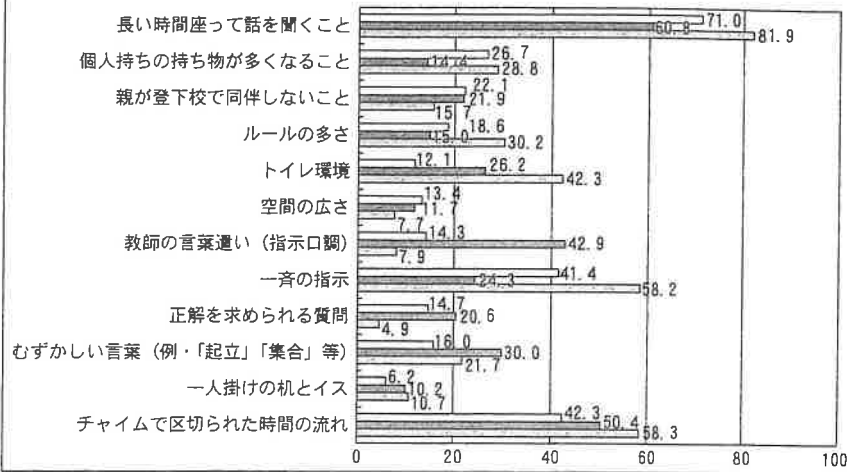
#### 〈参考文献〉

勝木洋子、『保育者をめざすあなたへ 子どもと健康』、みらい出版、2017年  
新保真紀子、『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』、明治図書出版、2018年  
全日本幼児教育連盟 畠山國彦、『幼児音体教育』、共同印刷株式会社、2004年  
内閣府・文部科学省・厚生労働省告示、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』、2017年

① /

図3 入学直後の1年生は何に戸惑いを感じていると思うか

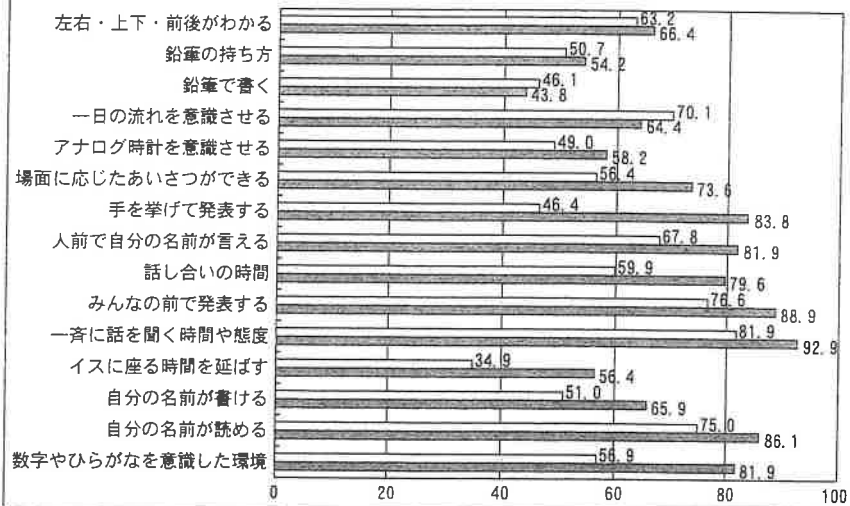
□ 保育所職員  
 ■ 幼稚園教員  
 ▨ 小学校教員



② 2

図4 入学を意識した配慮や取り組み

□ 保育所  
 ■ 幼稚園



3

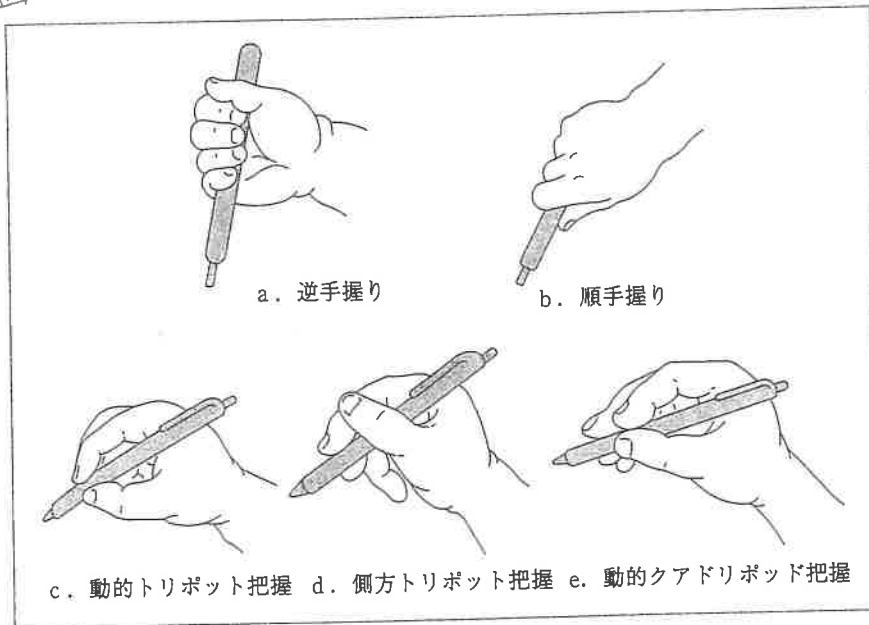


図3-10 筆記具の保持形態

出典：福田恵美子編『人間発達学』中外医学社 2009年 p.159

4

表6-2 食事の習慣の自立の標準年齢

年齢	食事	
	山下調査	谷田貝調査
	1936 (昭和11) 年	2003 (平成15) 年
1 歳		・自分で食事をしようとする
1 歳 6 か月	・自分でコップを持って飲む ・スプーンを自分で持って食べる	・自分でコップを持って飲む ・スプーンを自分で持って食べる ・食事前後の挨拶
2 歳		・こぼさないで飲む
2 歳 6 か月	・スプーンと茶碗を両手で使用 ・こぼさないで飲む ・箸と茶碗を両手で使用	・スプーンと茶碗を両手で使用
3 歳	・こぼさないで食事をする ・食事前後の挨拶 ・箸の使用	・こぼさないで食事をする
3 歳 6 か月	・箸を正しく使う ・一人で食事ができる	・箸の使用 ・一人で食事ができる
4 歳		・握り箸の終了 ・箸と茶碗を両手で使用
4 歳 6 か月		
5 歳		
5 歳 6 か月		
6 歳		・箸を正しく使う
6 歳 6 か月		
7 歳		

出典：谷田貝公昭・高橋弥生『第2版 データでみる 幼児の基本的な生活習慣 - 基本的な生活習慣の発達基準に関する研究』2009年 一藝社 pp.120-121